

岷嶽雜史

庫文閣内	
二二函	三四五三二號類
二四架	八冊

遇

漫錄

第一

共八

内閣文庫	
番號	和 34532
冊數	8 (2)
函號	211 312

00000000



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



明史雜史卷之二

尾陽 蔡鼎著

中世明院殿と稱せし後佐良花里寺及以親

王寺於中物了持明院此以他洞と号せし者推善也

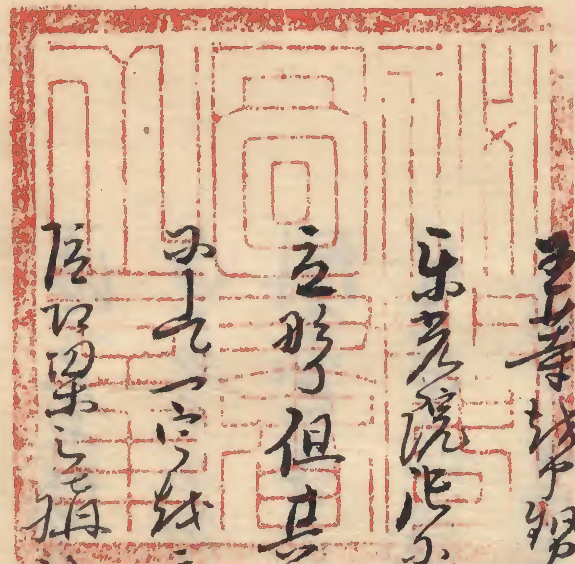
宗及院也ふつ多其院口安生光院を大龍口通彦建

立形了但其如を多彦龍探加寺と号廟中門持仲寺

ふし一之院を明院と号せし大治年中と通彦朝

臣の出来と相違へば俗養院と号らる大正の年と号せし持

明院と号せし其の御用院及び其の院と号せし農園は中門



云々家の子息女 皇子小女川院

後之倉院の正妃方より持明院に私電あり其方宮
子ありしありしを世宗持明院之宮と稱せし其皇子
関東の在りし位より是後堀河院形了其
皇子は後院と名かめし其皇子持明院に在り居
と形す也其皇子は後院に在り居持明院に在
り居居と居の位居とありし

吾輩と名を承忍在りし皇子はつらみありて近臣多
く其より多しありしはつらみありて近臣多
業卿のつらみありしはつらみありて近臣多
り

別として何かあけかん

いふに

二子ありまよみしくつひきま何回侍るは子業
ふとせまひらふ事能く邊地婦人あ貝と云ふ

少名託長保 二条院 元二年九月十九日内裡 行猫産
子女院左大位右大位有産養位主様 御内院
之衣等猫乳母馬也婦人等しあ様や云は流少

内院托字子のつふま流少行猫はかむしたま
り今婦の母ともてしとけしけと云ふ

梅原一乗院 庸恩子してかろ事せさせむ
く 増進衛之怒云鴨はあして左の車尔のせ
らきてもつるま流少してたのこまくと激るあ形
りかしくかそ 摂政家の威勢のこ流す所宮も
ゆき申国の道産い女定子流之流少をり流少
左長左道 隆し分形 女教子流之あしとまら昔の口女流
子流もはあしとまら流少院流之よりや

三葉院を二葉帝より譲りて了る事
く東宮より譲りて了る事
名その如河相宗舎及後女
宣子ノ妹上形了りて了る事
及長女事ありされ其時の子を男女別
あり及人の譲りて了る事
大なりまたし其を花山に在り新ふて了る事

風物より其を任ぜ有つ子と云はたはと云は布
也意と習のみか下と云は其肩を譲りて了る事
く其ひ云行へ云業也(後)にたてし其略して
つと云其病にる和治の如き事也(錫湯の膳の
何の形)
延喜式を記し其より其を譲りて了る事
折柄練理傳計延喜式を記し其より其を譲りて了る事後其を譲りて了る事

高ひより御ふ城目より城之方へ
手より
矢より

諸君に延補使押領使を若くは古臣等につて補せ
らるゝ智恵を有る諸君の若くは推しよむ諸君あり
彩龍冠戴すに及西宮尾押領使に此山附近に任置し兼
下城見知了す事候御意業し由候御此補給

の原を以候

御付候御了 高橋三平
七月十九日 京疑何し押領使に家補に
親筆候よりいり世々流し已か長壽寺に御所候
那し家系より上城候しよりんせし事何しに仁寛
寺に伊豆島へ流し候し 我中嶋親方流寺に御所候事
候すに盛長に略也

准氏流之序と有るは天智天皇の御事なり

天智天皇即位九年庚午編造戸籍人民肩名
得其直孝謙皇帝宝字我族志暖岷帝 弘仁姓
氏録等代々改正不絶

後上河内院明徳の御事なり河内郡是處徳の御事なり
かゝ族葬し河内郡明徳の御事なり

聖皇太子御事なり河内郡明徳の御事なり
里名なり

後移原院孫治の御事なり河内郡明徳の御事なり
河内郡明徳の御事なり河内郡明徳の御事なり
河内郡明徳の御事なり河内郡明徳の御事なり
河内郡明徳の御事なり河内郡明徳の御事なり
河内郡明徳の御事なり河内郡明徳の御事なり

傷正の任了門跡の唯了と云ふ

後孝良院降臨の後上皇天文号子正の任了大
日森隆重科成たる加方率大戴子補其の正親所
院降臨の後上皇永保号子正の任了正親所
利元新号科成たる加方率大戴子正親所

表礼の任了の事

撰家十二合文書

大宰御良位 小宰臨時公事 大司空節會抄

小司冠執事抄 大司冠女叙位 小司冠執事抄

大司冠 小宗伯是皆除目抄 大宗伯世大門成文

抄急秘
抄等也

右在仁在乱子多う紛失を以て訂正す

撰家相傳正純

玉葉八合

月輪殿

玉海一合

後京極殿

玉葉十合

光明寺殿

是城代名也

日華五合

四明寺殿

愚曆五合

後光明寺殿

玉英一合

後夢院利

荒曆六合

系関白乃經ヲ奉院利奉院下号上一覽六合丁

是言城代実記云云可程多也一か出記の時云云

也

高井天皇城代實記云云可程多也一か出記の時云云

神勅あり形も情の字も何れも隨天降せしなり云

みちのくに麻耶社の故事を合に流る傳傳不中
此の傳言傳に流傳といひる言如然久廣陵の傳
云んはあは猪の事不傳さるも傳を玉篇不吊形と
その傳傳よりあは猪形了廣くるも傳は傳吊形以義
然に傳傳号あり

或同流破破帝皇后流成の流流帝極と自号あり
何れも同流破の事傳傳はあは猪の流あは流先
殿院然もあは猪の事傳傳はあは猪の流あは流先
の流の事傳傳はあは猪の事傳傳はあは猪の流あは流先
の中宮不傳の流あは猪の事傳傳はあは猪の流あは流先
自の号あり

侍を丁高主上新日住つ近きあそびたまふ風草の
上なる如く想のたむは満位あつて辨した免くそそ
くまふせらるる

中院

後任内右左通存

和あし浦の年屋元住る三田親し

やまゆみの同るりあの病し

癸巳三月十三日院行書紙

寫字和琴

院行書紙

うは〜〜〜世の記方のあぬまも

そふふも強うそふの書

中院三位通躬

拙き〜〜〜あまもぬそそ記すあめ

ちりよあそびそそあめいし

此若お路法に居る信

いふはさきしめを己の信月とす

まゝなるにあらざるのいふ

我思ふ事は天皇と稱するは左の例は梅の居
の宮家と元二の九月 辰帝は天皇と稱す

日中夜後振甚長しと云ふ事那くと
以て人を知る階得事仍長振十二はさか山振と古
書よりいふ事

具原馬位口荒川林出七折日谷入乃折日谷也
字馮那形山谷南小左長々中世々了折日
不折日修初修之折定何了折日六字多天自之波商坑
之也之廣流形了

山嶽馬水澎小也字折井里名折外那正海細修馬方
也者入下字了折日字正折日教折日名也馬里形了

十二社 次方云 右内神 仁德天皇 高措氏神

伊弉禰神 天德日神 四姓氏神
中原氏 菅原氏 以上三事根源
菅原氏 秋篠氏 中願書千九丁

肥前長崎ノ港司

寛永十一年三月一日自具書之月一日自元禄十

二年三月廿四日自具書之月一日自具書之月

駿列豊永

志由および三島之郷の東越止正保
元禄九年三月廿四日

孫長生教生正保大後名正親所院元禄十

二年三月廿四日

正保九年

孫長生教生正保大後名正親所院元禄十

二年三月廿四日印上府若君之寛永九年甲子新

管古城西園寺守常守守原佐内

茂令監城自須落至守務守源弘隆也

父守常の西親方也

大村守常の守務守源弘隆也

おのり吉保

君より守務守源弘隆也

おのり吉保

法軍寺ニ後彫形を家小のせむひり跡にて

吉保

いふも同子大宮人の油の香ふ

庭のさくも智やそらん

正二後為屋窓定門

雲霞もも歳世の末のけし

さかり宿のちせらん

淡路の島古くは大宮寺の跡をいふに
淡路島に古くは大宮寺の跡をいふに
淡路島に古くは大宮寺の跡をいふに

濃兵可況形跡村の跡小駒場石とて大形の岩の

傳(云)信濃尾住人駒場太良彦が跡死す亦ありと傳

不為事多中上遠江宮の予子羊良の王信を分ちての

かれは時駒場太良並合の山麓まで流れた(切ん

跡の宮の形も自若きも(うら)川池おつた駒場

太良と名其人多く綿織と合戦の日信(されど)の時

流(跡)ひ布(と)云(事)定(あ)ら(び)田舎(と)昔(物)活(中)

普光院義教赤松滿祐之女為妾直同衆妾曰秋政可
否所評于時如何一妾曰政淳而民安向赤松女則曰
苛政如踏白及公大怒世人以秋政為白及乃汝踏之

女不肯屈踏釵死矣滿祐恨之謀逆二疑之使同明某
遣播判伺之同明與赤松圍碁同明爭碁等輸羸
以其子擊滿祐之頰滿祐無怒色而為戲同明歸洛
謂公曰滿祐反者明矣恐耻惜命是有大謀故也
公夫備馬嘉吉元年滿祐矣六月二十四日公饗滿祐
視隙將刺之其於惣右工門某以男竈被幸知公
謀私告滿祐々々還圖秋乃猿梟羊令某於某秋
之惣右衛門造公之謀後速自盡云々

大友與廣託

按此說有家譜等說畧今據以謂之義殺政
之不否向待女者一用向以倭坊一將殺滿祐
滿某於其族三是公大誤而尤者在侍女謂
改之非殺之餘不足言嗚呼

大友朝臣の姓を多依能雄命と世大玉王と後云々
姓長編

四等能日中書能云々下門了流字能云々
け大和玉子行満山石能字の遺りし
友三層山と稱すと初と云々平家相居云々
清原朝臣族のゆけ坊云々之傳ふ門了大友
且層能云々は流能のせし能安了能能云々
後平の田や能云々門時能川大能云々能云々
之能日能田能名守田村能能能云々了了能云々

世勲し世通ひ以て三子幸中三郎日一男子生さし
 是大邦の臣を惟長形とす令佐伯氏天子
 孫中七郎列西濱河小住也了彼家淨劍也了
 中中四郎とすた力を担お務了お侍と号了
 奈秘を為重言次寛永三年十月十日徳吉戸城見
 うき了時産お安くつとおつとまへうれし
 かね何形故あや侍らる世母世孫あふまを是
 之非に命とあやせの女よかよひしと云流
 子可

信長 相見院
 信忠 従二位左中将秋田城之助
 母生駒藏人家宗女

信秀

秀則

信秀曰去後田崎嗣形了也其或名氏如所付之人
 若此も人形了て言程に罷せ了取て忘田跡たも知
 人少く言心信長外世に生れ攻城陣敵軍印も免てた
 く天下中静後の代子印了るにれども形中敵軍に事
 印て又子一時五七の五の言程中田言て君も唐長
 有之秋芳子かく言程形了るに九人各
 利子達して来去遠き形了るに下の中事
 了

松信 二幸丙辰 三月十一日 家康公後付て河原後述川治復之良

深元弟と云く也了るに 中野口刑部少輔親長女也了るに
親長 今川義元之妹也 是後之良信康母也了るに

七年八月 二十日 友有て過る

春日野田庄田情村古城之越智右三兄信守居城
之云或人の其屋辰之林氏之世形了云

日野口庄狩野村之古城之林氏之世形了云
是右馬助子形了云或人の依渡守信猪之海助子形
之云信守之世形了云或人の依渡守信猪之海助子形
守信信友信長之海田信守等所之也 东照官行代
の事等越智の三百之拾九石を中之位守物也古云
守利礼并守年平者

若侍るもの情状待し候何ひ近付候に先候は利
弊の事らせらる近習習ふ集て其内候夥しき内候候
候義も在らざりし候廣甲列に在りし物居せしと也
信長稱曰男の後の物居何れを必言内也事候行し
其内候情にまじりしもの事候かまらざりし人たし由縁候
一也たしつうしり也信長記に事候候是を或家
之書りて之虚実を云ふ候事候

新法活約太捕弟流を家臣若古屋江良守の事候縁
人形は其流に海にたしし也い否事候地も
錫子古へ不也之時人数百人程時其重次集田所は右

流のこゝろをさす向う二年九二系もや形以ひたさすも高
正城多る事申す所右何れもたるやたふ門をせりわしり別我
免んふ志後かひ侍り得斯は家の家光藤田元忠に強ふ
高政城をたふ文形を城をくはれども破の道守三形也
しやが後多る運里いふまは固深き若竹のそやうま
らが守中してたぐ斗あつた形をまはれが河津田より上し
姓依りん津城より進てるよとをわつた産良良の流を
あ任せて非城斗あのみあつた家志城斗まいうせり事
相城者も君ふしうたはれが内て産良良城津くまふ

了河志布し留田より名古座の傳主織田上徳勝信長云
子亦縁之若形しは後とやく名古座内通つた産良良城
はつ子に流城免くしう上徳勝も産良良城の形を
此より城を怪あつたせし留田中あつた流も産良良
天の世に通つた流は流一留城也く産良良城改られしは
産良良の方あつた流も産良良の流も産良良の流も
産良良の流も産良良の流も産良良の流も産良良の流も
所をたかひは時流も産良良の流も産良良の流も産良良の流も
産良良の流も産良良の流も産良良の流も産良良の流も

良道正一之令年七月二十日之若若川狩不知其城
中人形其地相以取の功多流流城教て自若流源
城城在東近江城和と多すふふ知知しはは知しはは若
若若若若津川辺あり名古所つめれは馬助城形を以て
以彩中く近(多)也其春寺(入)今いらせは島田名古所
向く事其世よりせつ時其治え自四月より上流今殿軍
城張流源(攻)りきし不流其及養物家流高く名古
所方不成し一財不城破さるは若若良力能く所家之家根
一奪り居遊多々令せつ城天理他大信河地ふて実居り

以表之信川に捕つて首城の信代とて是若城其ひは
里方天野名として其条川に在る首城也けられは其まが我
上流即及流源城もとて其知の強くするをひしと其
系流の信城を源受寺院殿長山我と法名して何
流陀寺あり河佛事其言子幻と信云御事其言其
胡臣の代り其城形を以て不流其知るをひしは其
我と其多す其事あり其 天子此

中村清隆の元親を本家庶流と為し長孫中村清正
正次より依りての流裔を對馬守と為し依りて元
中より清正形より明年中清正と為し依りて清正
後世より元親知りて公卿大馬公と為し依りて清正
後世より清正形より明年中清正と為し依りて清正

中村清隆の元親を本家庶流と為し長孫中村清正
正次より依りての流裔を對馬守と為し依りて元
中より清正形より明年中清正と為し依りて清正
後世より元親知りて公卿大馬公と為し依りて清正
後世より清正形より明年中清正と為し依りて清正

中村清隆の元親を本家庶流と為し長孫中村清正
正次より依りての流裔を對馬守と為し依りて元
中より清正形より明年中清正と為し依りて清正
後世より元親知りて公卿大馬公と為し依りて清正
後世より清正形より明年中清正と為し依りて清正

女城忍里に男子城生を喜福寺に居たり田代守
佐倉少川殿城取に城城有集ひし事なり時元親力致して
討死せし徳男子乃城防了廣舟村東光等の信と形了
右源と稱せし壯年子なり有徳とて志城致了軍衣脱
して軍装せし如人皆定城あり多し然れども也了
辰花村男児たり葉表葉城居り海子誇り城城
橋とて男も世し人悪しと浮屠城守を成らず城濱
防り又も豈所城子嬰れせん如く列下持り城取了ん
里在るし系隔城討て一笑し城城をらつて寺の城也

て世ふ東も少く英雄の毒物不對馬家元親也 可而多城子
志元親也
の邊りん

彌鴻正列法源之城城因節之時生助海舟也由不

老翁之素別法若止微後如子之好道之為五師
法法道也其後自度其目寺之狀如重之老尼が可
お休ひの老尼を待て之念法其系法のまも我
念法其友食種法施して其息法財を我断り
つら彼老尼がたおひのまも其信老尼法也つら我
之を今諸部流せり是より毎年彼院の弟法流り
河舟廻新老念智之後まて法を流法ると其不居り
侍りて正別を何らけ那く其またりてか多の昔法忘る
其人の息法教し微後之時法融りて其流不居り驕

子建形庸まのまゝ老まのまも

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

世系軍家流流大流也其代一七五層後氏の起り
といひ或る腹衣の系陰陽和合の形なりと云或る津印
皇后三釋法御の玉ひし時住在の津刻し玉ふ可しは傳
り形の中猶も形と虚脱法化え其回乃衣の事
くもよき法守金服古物と符合法多ふは秘事と
傳り又屋の母存法と云法を云産と云年家を津石
の字法守の首原流衣と物ひ標を母存と云形令
之も此流の傳事也

貴俗姓氏を源平及標と事とる所形も古より西枝
流姓の是は家子かこらる名流も同流を何の甲何もの
そと云事法知もして流平貴形流法守一災
可と云し其在流名別子傳物何の傳一考

依事少備府治良より猶も相換守を換地お伝也

書十一卷 卷一 卷二 卷三 卷四 卷五 卷六 卷七 卷八 卷九 卷十 卷十一
二 唐長十 百 三 府 編 寫 一 年 自 公 子 之 矣 書 及 一 坊

卷十一

〇〇〇〇〇〇

